

氏名	ナカ シマ カツ ヒコ 中 嶋 克 彦
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第204号
学位授与年月日	平成24年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉 ロッシーニ・テノールの歌唱法についての一考察 －歌劇《セビリヤの理髪師》のアリア〈もう逆らうのはやめろ〉 を中心に－ 〈演奏〉 ジョアキーノ・ロッシーニ 歌劇《セビリヤの理髪師》ハイライト
総合審査委員	
（主査）	東京芸術大学 准教授（音楽学部） 吉田浩之
（副査）	〃 教授（ 〃 ） 川上洋司
	〃 〃（ 〃 ） 永井和子
	〃 〃（ 〃 ） 大角欣矢

（論文内容の要旨）

ロッシーニという作曲家の作品には、聴衆を魅了して止まないものがたくさんつまっている。だが、それを演奏するのは簡単ではない。ロッシーニが生きていた時代の演奏法を研究し、現代の劇場において通用するものに変えて聴衆に届けていかなければ、ロッシーニの本当の良さを伝えることは難しい。とくにテノールにとっては、高音域を含むアジリタ等といった独特の難しさがある。それを克服するにはどうしたらいいのかを探るためにこの研究を行った。

第1章では、ロッシーニにおけるテノールの変遷について研究した。第1節では当時ロッシーニを歌ったテノール歌手について考察し、声やテクニックの変化などを探った。ロッシーニの歌唱法は装飾歌唱であるベルカント唱法の頂点をなすものだが、同時に、テノール歌手にとっての声の転換期でもあった。ロッシーニを歌ったテノール歌手には2種類あり、バリテノールとテノーレ・コントラルティーノに分けられる。この分類をもとに、ロッシーニのオペラ作品の中でテノールの役の初演を歌った歌手たちについて確認した。第2節では現代のロッシーニ・テノールとロッシーニ・オペラ・フェスティヴァルの重要性について考察した。1980年に始まったロッシーニ・オペラ・フェスティヴァルでは、これまで忘れられていたロッシーニ・オペラの復活上演が多数おこなわれている。このフェスティヴァルから現在一線で活躍しているテノール歌手たちが登場してきたことを示し、フェスティヴァルの重要性を再確認した。またロッシーニを歌うテクニックを獲得するうえで、若手育成機関であるアカデミー・ロッシニアーナの存在が大きいことを述べた。

第2章では、《セビリヤの理髪師》第2幕のアルマヴィーヴァ伯爵のアリア〈もう逆らうのはやめろ〉に焦点をあてた。この曲は、初演でマヌエル・ガルシアが歌って以来、最近までカットされる習慣になっていた。テノールにとって歌うのが非常に難しかったという理由のためである。それが1970年ごろからロックウェル・ブレイクやウィリアム・マッテウツィなどによって再び歌われるようになってきた。第1節ではこの曲のオペラにおける重要性と、カットされてきた歴史を論じた。第2節では代表的な歌手5人の演奏を分析し、歌手ごとの特徴や、この曲の難しい点などを研究した。取り上げた歌手は、ロックウェル・ブレイク、ウィリアム・マッテウツィ、ラモン・ヴァルガス、ファン・ディエゴ・フローレス、ジョン・オズボーンの5人である。分析の結果、様式感を持ってアジリタを歌うことの難しさや、アリアを歌いこなすテクニックの基礎としてのメッサ・ディ・ヴォーチェの重要性が明らかになっ

た。

第3章では、これからの展望として、ロッシーニ・テノールに必要なことを考察した。第1節では日本におけるロッシーニ・オペラの現状について論じた。演目が《セビリヤの理髪師》に偏っているということと、日本人のテノールにロッシーニを歌う歌手が少ないことがわかった。第2節では第2章での分析結果に基づき、高音域を含むアジリタを歌うためのメッサ・ディ・ヴォーチェのテクニックの必要性について述べた。第3節ではそのための具体的な練習方法を挙げ、今後の自分の目指す道を探った。

日本におけるロッシーニ・オペラの上演はまだまだ少ない。ただ、イタリア・ペーザロにおいてロッシーニ・オペラ・フェスティヴァル、アカデミア・ロッシニアーナが開かれロッシーニ復興を成し遂げたように、日本においてもロッシーニを演奏していくのに十分な環境はあると考える。

この研究を通じて、これまで手をつけることを避けてきた〈もう逆らうのをやめろ〉という難曲に挑戦しようという気持ちを持つことができた。このことが自分にとってのこれからロッシーニを歌っていく上での力になっていくであろう。これからもロッシーニの作品に全力を注いで精進していきたい。

(総合審査結果の要旨)

ロッシーニのオペラの歌唱について研究を重ねてきた申請者にとって、謂わば憧れの曲として存在する《セビリヤの理髪師》の終盤で歌われる難曲である、アリア〈もう逆らうのはやめろ〉を中心に置いての演奏・論文となった。今後に向けては更なる声の輝きと華やかなアジリタが加わる事を期待する意見を強くいただいたが、今まで、あまりの難易度の高さに省略される事の多かったこのアリアを見事に歌いきり、見事な演奏となった。

論文については、ロッシーニが活躍した当時から現代に至るまでのロッシーニを歌った歌手達の系譜と、その背景を明らかにし、難曲であるアリア〈もう逆らうのはやめろ〉について詳細に検討し、それがドラマ・音楽の両方において重要な意味を持つ事を、説得力を持って示した事は意義があるが、先行研究に依る所が大きい。また、同アリアについて、現代の歌手(ロッシーニ・テノール)による演奏録音5点を分析し、メッサ・ディ・ヴォーチェ(Messa di voce)の技術を習得する事の重要であるとの結論に達してはいるが、その理論的な説明が不足しており、発声の基礎的な訓練から、実際の演奏に具体的にどの様に生かしていくかというプロセスが詳細に述べられていれば、さらに有効性のある論文となった事であろう。

しかし、歌手としての歌唱という観点を中心に据え、歴史的概観を踏まえて現代におけるアプローチを提言した本論文は、実技分野としての研究の特色を十分に打ち出したものである。

以上、演奏と論文を総合的に判断し、合格とする。